

日本近代思想史の構造的 연구 —獨逸学協会学校の変遷から—

獨協大学大学院経済学研究科
博士前期課程 堀 佑二

目次

はじめに

序章

第1章 近代国家形成期の獨逸学協会学校

第1節 獨逸学協会学校創設の経緯とカリキュラム

第2節 ミハエリスの国家思想

第3節 獨逸学協会学校のねらい

第2章 近代帝国主義形成期の獨逸学協会学校

第1節 日清・日露両戦争とナショナリズムの高揚

第2節 「三太郎」文法教科書によるドイツ語教育

第3節 帝国教育会における近衛篤麿と大村仁太郎

第3章 都市的ブルジョア形成期の獨逸学協会学校

第1節 社会主義運動と国家の対応

第2節 協会学校が生んだ2人の国家官僚

第3節 大村仁太郎の自由な教育思想

むすび

要旨

本論文は、1883(明治16)年に設立された私立学校である獨逸学協会学校(現、獨協大学)を取りあげる。現在までに学校の周年史が6巻と新宮譲治、堅田剛両氏の研究など、学校史の観点からみると獨逸学協会学校の研究はかなり充実してきている。ところで近代における学校の歴史は、近代思想史とも大きくかわりがある。したがって本稿では同校を学校史の枠から一歩踏み出し、日本近代の思想構造のなか

に位置づけてみる。

序章では、獨逸学協会学校設立以前の日本の動向についてみている。欧米諸国による外部の圧力から徳川幕府は開国を余儀なくされた。その後徳川幕府は倒され、薩摩藩、長州藩のメンバーを中心とする明治政府が誕生した。明治政府は欧米諸国の思想をとり入れることに積極的であり、それが日本を近代化の道へと進ませることとなった。欧米思想をとりいれているなか、政府内部ではドイツ思想とイギリス思想で対立していた。そして1881(明治14)年10月、イギリス思想をもつ大隈重信一派を排除する政変がおきた。その結果として明治政府はドイツ国家思想を政府の思想として統一した。この政変と同年9月に獨逸学協会が結成され、1883(明治16)年に獨逸学協会学校が設立することになる。

第1章では、「近代国家形成期の獨逸学協会学校」について、獨逸学協会学校創設の経緯とカリキュラム、ドイツから来たお雇い外国人であるミハエリスの国家思想、獨逸学協会学校のねらい、の3点を考察する。

獨逸学協会学校の創設に最も影響があったのは、1881(明治14)年10月におきた明治14年政変である。そこでイギリス思想をもつ大隈一派を排除して、ドイツ国家思想を政府の思想とした。この政変を水面下で動きまわっていた井上毅は、福沢諭吉の著書が多く読まれて福沢思想がひろまったように、政治の力ではなく教育によってドイツ国家思想をひろめ、そしてイギリス、フランス思想にうちかつよう三大臣に提案した。この内容をもとに1883(明治16)年に獨逸学協会学校が設立された。コースは普通科と専修科の2つがあり、普通科はドイツ語教育を中心とした尋常中学校程度のコース、専修科は政治、経済、法律などより専門的な内容の授業をし、ドイツ国家

思想を学んだ国家官僚の養成を目的とした。

ゲオルグ・ミハエリスはドイツから来たお雇い外国人であり、獨逸学協会学校専修科の教頭を務めた人物である。ミハエリスが獨逸学協会学校、そして日本にもたらした影響が2つある。1つは裁判官養成の重要性である。裁判官は、独立不羈の立場で公平に裁くことが求められている仕事のため、司法を学ぶ学生にとってはこれ以上のない見本である。代言人は利益のために主張を変える仕事であるから学生が学ぶのにふさわしくないと指摘する。これは単に裁判官を重んじ、そして代言人の評価を下げているだけでなく、裁判官を中心とするドイツを称賛し、代言人社会であるイギリスとアメリカを批判するといった目的も含まれている。もうひとつは兵式体操である。ドイツが強大な力をもつようになったのは、普通就学義務と普通兵役義務の2点の結果である。見識や知識のない頭の動きの鈍い奴僕でも、軍隊に入るとたちまち頭の働きや行動の素早い、上品な人間になれることができる。また軍隊によって忠君愛国思想の精神が培われる。ミハエリスは、ドイツ司法制度の優位と兵役義務の必要性を強調し、アメリカ、イギリス、フランスの自由主義思想に影響されないように、またドイツ国家思想を普及させることを考えていた。

獨逸学協会学校のねらいとは、ドイツ国家思想の普及と国家官僚の養成にある。ドイツ国家思想の普及について、明治初期の日本ではドイツ語を教える学校が少なかったこと、明治14年政変で政府の思想がドイツ国家思想で統一したのにもかかわらず文部省は第一外国語を英語にするという矛盾、しかし国として学ぶ必要性があったことからドイツ語を学ぶことができる獨逸学協会学校は貴重であった。国家官僚の養成について、獨逸学協会学校専修科がその役割をになうこととなったのは、当時の最高学府である東京大学(東京帝国大学の前身)がドイツの制度を採用していたもののイギリス、アメリカ人がドイツ法を教えるなど整備が未熟であった。そこで専門的な内容を教授している獨逸学協会学校専修科が注目された。政府から多額の補助金が出て、その結果第1回文官高等試験では、他の私学よりも高い合格率をだした。このような点で獨逸学協会学校は期待されていたのである。

第2章では、「近代帝国主義形成期の獨逸学協会学校」について、日清・日露両戦争期における日本でのナショナリズムの高揚、ドイツ語の教科書では当時大変人気のあった、大村仁太郎・谷口秀太郎・山口小太郎の「三太郎」によるドイツ語の文法教科書と教育、帝国教育会における近衛篤磨と大村仁太郎、の3点を考察する。

近代国家をめざした日本は、欧米諸国の学問、制度などをどんどんとりいれていった。この開明主義的精神は日本人を近代国家の市民への一步を踏み出させた。しかし不平等条約改正のために制度、文物、習俗を欧風化し日本の開化を認めさせるようにするため、「滑稽」な衣装を着てパーティをおこなった鹿鳴館は行き過ぎたことであると国内からも非難された。この鹿鳴館の例にみるような、藩閥政府の貴族的専制的な、上からの欧化政策への直接の反発としてでてきたのが、徳富蘇峰の「平民主義」、志賀重昂の「国粹主義」である。この両者の媒介があったため、明治10年代のナショナリズムは20年代の平民主義、国粹主義の媒介を経て天皇制権力の「国家主義」を支える力にすなりと移行した。日露戦争で非戦を唱えた内村鑑三も、日清戦争直前は島国根性的な自己閉塞的ナショナリズムから脱却し「世界の使命」を果たすナショナリズムの台頭を期待した。教育の場では、資本主義の発展と対外膨張の「栄光」のなかに抑圧された自我の拡大という幻想から義務教育の就業率が急激に上昇していた。

以上のような極端な西欧化による反発、自己閉塞空間からの解放などからナショナリズムが高揚されていった。そして日清戦争は国民戦争的な外観をもつことになる。また日清戦争によって分割し獲得した領土をロシア、ドイツ、フランスの三国によって干渉されると、「臥薪嘗胆」をスローガンに日露戦争へと発展し、日本が帝国主義化していくこととなる。

ナショナリズムの高揚による影響は政府の人間にとどまらず、幅広く国民にひろがっていった。それは、大村仁太郎、谷口秀太郎、山口小太郎の「三太郎」によって作成された『獨逸文法教科書』に戦争の例題や練習問題が多くみられることから明らかである。しかしこういった面もありながらこの『獨逸文法教科書』が優れていると評価されているのは、ドイツ人のための教科書ではなく日本人が学ぶため

のドイツ語教科書として作成したこと、また学生に外国語教育を通じて徳性の涵養をはかるとともに、外国の文物制度を学ばせて近代ヨーロッパの思想を考える力を養うことを目的としていたからである。

その大村仁太郎が参加していた「帝国教育会」は、「東京教育会」と「東京教育協会」が合併してできた「東京教育学会」から全国的な組織にするため規則を改正して設立した「大日本教育会」となり、さらに「国家教育社」との合併によってできた教育団体である。さまざまな組織から成り立っているため規模が大きく、また政府の御用団体的性格を有していた。しかし帝国教育会は大日本教育会による御用団体的性格だけでなく自由な性格もおびており、義務教育費国庫負担を要求する運動や女子教育普及に力をいれていた。帝国教育会の初代会長は近衛篤磨で、大村仁太郎と近衛篤磨の関係は密なものであった。近衛篤磨、大村仁太郎の両者ともに「国家のため」の教育といった制約はあるが、しかし家庭教育を通じて子どもの成長を促すといった新たな教育の可能性を見出した点は重要である。

第3章では、「都市的ブルジョア形成期の獨逸学協会学校」について、社会主義運動と国家の対応、獨逸学協会学校専修科卒業である有松英義、小山松吉という2人の国家官僚、獨逸学協会学校第4代校長である大村仁太郎の「自由」教育思想、の3点を考察する。

日清戦争に勝利した日本は、帝国主義化していくとともに産業革命がはじまった。これは一方では資本主義の発展であり、もう一方は格差による労働者の賃金低下、失業不安という社会問題をもたらした。この社会問題により労働運動、社会主義運動が活性化され、社会主義に関する組織ができた。それを危機と感じた政府は、次々と社会主義に弾圧をくわえていった。その最たるものは赤旗事件と幸徳事件(大逆事件)である。赤旗事件は社会主義者たちと警察官とで旗の取り合いをして社会主義者たちが検挙される事件であるが、それは行為による取締りでなく思想による取締りであった。赤旗事件は直接行動派の社会主義者を刺激し、幸徳事件へと発展させた。幸徳事件は首謀者だけでなく多数の無実な社会主義者たちをわずか7カ月間の非公開裁判によって死刑12名、無期・有期刑14名という判決を出し

た。これにより社会主義者たちにとって「冬の時代」となった。

大逆事件にみられるような一連の社会主義運動を弾圧したメンバーのなかに、獨逸学協会学校専修科を卒業した2人がいた。それは有松英義と小山松吉である。有松英義は行政執行法と治安警察法の2法の制定に大きくかわかり、特に治安警察法は社会主義運動と労働運動の取り締まりに大きく関係をした。小山松吉は大審院検事、検事総長、司法大臣を歴任し、幸徳事件、朴烈事件、虎ノ門事件など主に思想関係の事件に多くかわった。小山松吉のいっていた思想は天皇を絶対視する皇室中心思想であった。有松と小山の2人は社会主義など自身が取り巻く環境の思想と違うものを取締まり、そして社会主義を罪人とした点で一致していた。つまり意図する思想以外を排除する思想統制をおこない、それ以外の人間には自由を与えないという方針であった。

獨逸学協会学校は専修科を卒業した有松英義や小山松吉をはじめとして多くの国家官僚を生みだしていき、国家の役割を果たしていった。しかしそういった人物だけを輩出していったのではなかった。それは第4代校長である大村仁太郎の自由な教育思想の影響が大きかった。大村仁太郎の教育は、従来の教師が生徒に対して考えを一方的におしつけ、厳しい懲罰によって生徒に有無を言わせないような方法ではない。むしろ生徒が自主的に行動をすることを望んでいるように、生徒に対する人権を与えるような考え方をもっていたのである。有松と小山による自由を与えない方針とは異なり、大村は人間の活動を自由にして尊重していくといった考えである。大村は45歳という若さで亡くなるが、大村の思想は獨協中学・高等学校の校長となった天野貞祐にうけつがれていく。

大村、有松、小山にみる進歩性と反動性という矛盾的構造は、日本近代の思想構造にもみることができる。獨逸学協会学校の変遷、時代の段階性をみていくことにより、同校が日本近代の思想構造に位置づけられることは重要なことである。

【参考文献】

1. 天野郁夫『近代高等教育研究』玉川大学出版部、1989年。
2. 天野郁夫『大学の誕生』上下巻、中公新書、2009年。
3. 新井孝重「獨逸学協会学校専修科生徒の顔」(『獨協経済』第83号)獨協大学経済学部、2007年。
4. 新井孝重「大村仁太郎の教育思想にみる「近代」の可能性」(『獨協学園資料センター研究年報』創刊号)獨協学園資料センター、2009年。
5. 有松英義講述『行政執行法治安警察法講義』(第10版)警眼社、1930年。
6. 家永三郎編『近代日本の争点』(中)、毎日新聞社、1967年。
7. 家永三郎「近代思想の誕生と挫折」(松本三之介編『家永三郎集』第1巻 思想史論)岩波書店、1997年。
8. 絲屋寿雄『増補改訂 大逆事件』三一書房、1970年。
9. 色川大吉「ナショナリズム論」(同『色川大吉著作集』第2巻 近代の思想)筑摩書房、1995年。
10. 色川大吉『明治精神史』(上・下)岩波現代文庫、2008年。
11. 上田庄三郎「教育団体史」(石山脩平編『教育文化史大系』第5巻)金子書房、1954年。
12. 潮木守一「勉強と遊びの文化」(同『ドイツの大学—文化史的考察—』)講談社学術文庫、1992年。
13. 海原徹『明治教員史の研究』ミネルヴァ書房、1973年。
14. 大久保利謙『日本の大学』創元社、1943年。
15. 大村謙太郎編『大村教育著述全集』(全3巻)同文館、1911年。
16. 大村仁太郎、山口小太郎、谷口秀太郎合著『再訂 獨逸文法教科書』(前編 第廿三版)獨逸語学雑誌社蔵版、1903年。
17. 大村仁太郎、山口小太郎、谷口秀太郎合著『再訂 獨逸文法教科書』(後編 第廿一版)獨逸語学雑誌社蔵版、1909年。
18. 太田雅夫編『社会主義協会史』(明治社会主義資料叢書 第1巻)新泉社、1973年。
19. 安川寿之輔「日本資本主義の発達と教育」(小川太郎・伊ヶ崎暁生編『日本資本主義と教育』講座現代民主主義教育 第2巻)青木書店、1969年。
20. 菅野スガ「大逆事件—死出の道草—」(尾崎秀樹編『社会と事件』(現代日本記録全集 12)筑摩書房、1970年。
21. 大日方純夫『天皇制警察と民衆』日本評論社、1987年。
22. 堅田剛『獨逸学協会と明治法制』木鐸社、1999年。
23. 堅田剛「獨逸学協会 教師としてのゲオルク・ミヒャエリス—ミヒャエリス著『国家と国民のために』より—」(同『獨逸法学の受容過程 加藤弘之・穂積陳重・牧野英一』)御茶の水書房、2010年。
24. 上村直己「明治初年の東京のドイツ語塾について」(『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編 第20号』)熊本大学教養部、1985年。
25. 工藤武重『近衛篤磨公』大日社、1938年。
26. 警察協会『故有松英義君追悼録』警眼社、1929年。
27. 警察文化協会「小山松吉」(同『警察時事年鑑—歴代法務大臣—』)警察文化協会、1979年。
28. 合田憲「Die Deutsche Sprache in Japan と大村仁太郎について(1)」(『姫路獨協大学外国語学部紀要』)姫路獨協大学外国語学部、1991年。
29. 小林俊三「小山松吉」(同『私の会った明治の名法曹物語』)日本評論社、1973年。
30. 小山松吉『思想犯罪の原因に就いて』(方面叢書 第3輯)全日本方面委員聯盟、1935年。
31. 小山松吉『日本社会主義運動史』司法省刑事局、1929年。
32. 小山松吉『日本精神読本』日本評論社、1935年。
33. 小山松吉『日本精神』(時局と国民自覚大講演会集 第8輯)日本文化中央聯盟、1938年。
34. 小山松吉『祖国の誇り』社会教育協会、1939年。
35. 坂本多加雄『明治国家の建設 1871-1890』(伊藤隆編『日本の近代』第2巻)中央公論社、1998年。
36. 新宮譲治『獨逸学協会学校の研究』校倉書房、2007年。
37. 鈴木俊郎『内村鑑三全集』(第3巻)岩波書店、1982年。
38. 大霞会内務省史編集委員会『内務省史』(第1巻)大霞会、1971年。
39. 大霞会内務省史編集委員会『内務省史』(第2巻)大霞会、1970年。
40. 高橋雄豺「有松英義」(同『明治警察史研究—明治年代の警保局長—』第4巻後編)令文社、1972年。
41. 立本紘之「治安警察法と治安維持法」(『歴史と地理』642号)山川出版社、2011年。

42. 帝国教育会『帝国教育会五十年史』帝国教育会、1933年。
43. 寺崎昌男『東京大学の歴史 大学制度の先駆け』講談社学術文庫、2007年。
44. 遠山茂樹「ナショナリズムの特質」(『遠山茂樹著作集』第5巻 明治の思想とナショナリズム)岩波書店、1992年。
45. 東京大学近代立法過程研究会編「近代立法過程研究会収集資料紹介(14)―有松英義関係文書(1)―」(『国家学会雑誌』第86巻)国家学会、1973年。
46. 獨協学園七十五年史編集委員会編『獨協学園七十五年史』獨協学園、1959年。
47. 獨協学園百年史編纂委員会編『獨協百年』(全5巻)獨協学園、1979-1981年。
48. 獨協学園百年史編纂委員会編『獨協学園史 1881-2000』獨協学園、2000年。
49. 中井晶夫「ゲオルク・ミハエリスと日本(1885-1922)」(『ドイツ語圏研究』第6号)上智大学ドイツ語圏文化研究所、1988年。
50. 中野光監修『帝国教育会機関紙『教育公報』解説編』大空社、1984年。
51. 永原慶二『20世紀日本の歴史学』吉川弘文館、2003年。
52. 中村文雄『大逆事件の全体像』三一書房、1997年。
53. 橋川文三編『近代思想史の基礎知識』有斐閣、1971年。
54. 福島博編『獨逸学協会学校五十年史』獨逸学協会学校同窓会、1933年。
55. ベルト・ベッカー『ゲオルク・ミハエリス―ドイツ帝国宰相と獨逸学協会学校―』獨協大学外国語学部ドイツ語学科、2003年。
56. 報知新聞社通信部「小山松吉」(同『名士の少年時代 新人国記 東北、関東、中部篇』)平凡社、1930年。
57. 松沢弘陽責任編集『内村鑑三』(日本の名著 38)中央公論社、1971年。
58. 松本清張「朴烈大逆事件」(同『昭和史発掘』新装版第1巻)文集文庫、2005年。
59. 矢羽々崇「<三太郎文法(『獨逸文法教科書』)>の歴史的意義と現在性」(『獨協学園資料センター研究年報』第2号)獨協学園資料センター、2009年。
60. 山室信一、中野目徹校注『明六雑誌』(下)岩波文庫、2009年。
61. 山本茂樹『近衛篤磨―その明治国家観とアジア観―』ミネルヴァ書房、2001年。
62. 我妻栄編『日本政治裁判史録 明治・後』第一法規、1969年。
63. 我妻栄編『日本政治裁判史録 大正』第一法規、1969年。
64. 我妻栄編『日本政治裁判史録 昭和・前』第一法規、1970年。
65. 渡辺忠威『警察教育の先覚者たち』立花書房、1982年。
66. 渡辺忠威『日本警察史点猫』立花書房、1977年。